

研究の経過と成果

- 一 課題と組織
- 二 研究経過
- 三 対象地域
- 四 研究成果の概観

福田アジオ

一 課題と組織

歴史はそれぞれの時代に適した場所を選んできた。時代を貫通して常に人々の活躍の舞台となった地域は少ない。ある時代に華やかな文化が展開した地域が次の時代には静かなたまたまの土地に戻っていることは珍しいことではない。世界規模でもこのようなことはごく一般的に見られるし、日本列島においても多くの例が知られている。古代に政治の舞台となったところが中世以降は静かな農村に戻り、中世に代表的な荘園があつて、経済的に大きな展開を見せた所が近世以降は特別顕著な地域としては存在せず埋もれてしまったかのような所もある。

日本歴史の叙述はそのような舞台を時代毎に設定して、それを縦に結ぶことで描かれてきたといつてよいであろう。それぞれの時代に人々の顕著な活躍が見られた地域には、当然のことながらそれを示す史料の残存も大きく、豊富な史料に基づく豊かな歴史像を描くことも相対的に容易である。今まで多くの研究は、史料の残存度に依存してきた。史料が豊富に残されている所を対象に緻密な研究が行われ、その時代の展開や特質が描き出されてきた。それは結果として、その時代の代表的な舞台において歴史を描くことになった。日本史の通史的な概説書や歴史教科書において、各時代の歴史像を示しているのはそのような有名な舞台であつた。

しかし、ある時代に歴史の舞台となった地域がその前後には無人の廃

墟であつたわけではない。華やかな舞台になった時代の前と後には、やはりその地域を生活の場として暮してきた多数の人々がいる。その人々は華やかな活動をした人々と交替してそこに居住しているのではない。

活躍した人々の子孫が、活躍した時期の環境や条件を継承して暮しているのである。いくら有名な歴史の舞台とならなかつたからと言つて、そのような人々には歴史がなかつたとは言えないであろう。華やかな、あるいは顕著な歴史が展開した時期だけでなく、ごく平凡であつた時期、ほとんど何も起らなかつたようにさえ思われる時期も視野に入れて、歴史の大きな展開を明らかにする試みがあつてもよいはずである。そのことがむしろ歴史の総体的理解になるのではなからうか。

今回の国立歴史民俗博物館の特定研究は従来の歴史研究のあり方に対する反省に基づき、時代を超えて一つの地域がどのように歴史を形成し、展開してきたのかを総合的に明らかにしようとするものであつた。文字資料である史料にのみ依拠したのでは、華やかな活躍の時期のみが分析可能となり、平凡であつた時期は柳田國男が指摘したように無歴史地域の無歴史住民となつてしまふ。そこで、国立歴史民俗博物館の存立の根拠となつている三学協業を十分に發揮することで、時代を超えた長い時間的なでのダイナミックな歴史を描きだそうと努力することとなつた。その場合に、従来の歴史研究が豊かな歴史像を描くことに成功してきたのは、その豊富な史料に裏付けられた中世の畿内荘園を対象とした研究であつた。そこで、この中世の近畿地方荘園領域を対象にすえて、その荘園の時代を超えた長い時間の歴史的展開を総合的に明らかにすること

を課題にして研究組織を作ることとなった。

研究計画は国立歴史民俗博物館の内部の歴史学、民俗学の有志によって検討され、次のような研究目的を設定した計画書を作成し、国立歴史民俗博物館の石井進を研究代表者として特定研究を申請した。

村落史研究は歴史学の主要なテーマのひとつとして各時代を通じて膨大な蓄積を生み、村落史を通じてその時代像が描かれている。しかし対象とする地域・村落はそれぞれの時代で異なり、たとえば中世史研究で盛んに取り上げられている村落はそれ以前の古代、あるいは近世、近代、さらに民俗学の研究において殆ど目を向けられていないのが実状であり、これは歴史の総体的把握に大きな支障をきたしている。

そこで本研究では近畿地方を対象に中世史研究で盛んに取り上げられ、中世史の時代像を形成している村落が、各時代を通じて如何に変貌を遂げていくのかを明らかにするとともに、その民俗的特質を把握することにより、それぞれの時代的特色と一貫した時代像を描くことを目的とする。対象地域として近畿地方を選択したのは当該地が中世・近世において政治経済の中心地であり、多くの荘園が散在することから中世村落史研究の主要な成果を生んでいること、また近世・近代村落史料も豊富に残されていることから、時代を通じた歴史像を描くことに適しているからである。近畿地方のなかでも特に中世荘園の顕著な発達がみられた紀伊国紀ノ川流域、「中世的世界の形成」で著名な伊賀国黒田荘を中心とする伊賀国を対象とし

たい。

そして、この研究に研究分担者として参加する人々についても、目的との関連で適切な研究者を依頼することとして、中世史、近世史、地理学、民俗学の少壮研究者に候補者を絞り折衝した結果、いずれの方もその主旨を理解され快く参加して貰えることとなった。その研究組織は左記のような陣容となり、総員一三名という共同で現地調査を行うのもっとも適当な規模で組織することができた（各所属機関は一九九二年四月当時のもの）。

石井 進	国立歴史民俗博物館歴史研究部	中世史
出田 和久	大阪教育大学	地理学
勝田 至	大阪外国語大学	中世史
久留島典子	東京大学史料編纂所	中世史
藤田 達生	神戸大学文学部	中世史
鈴木ゆり子	東京外国語大学	近世史
渡辺 尚志	国文学研究資料館史料館	近世史
深谷 克己	早稲田大学文学部（国立歴史民俗博物館客員）	近世史
森栗 茂一	大阪外国語大学（国立歴史民俗博物館客員）	民俗学
福田アジオ	国立歴史民俗博物館民俗研究部	民俗学
新谷 尚紀	国立歴史民俗博物館民俗研究部	民俗学
福原 敏男	国立歴史民俗博物館民俗研究部	民俗学
岩城 卓二	国立歴史民俗博物館歴史研究部	近世史

幸いにしてこの研究計画は一九九二、九三年度の二年間の特定研究と

して承認された。そこで一九九二年五月以降早速に研究計画を具体化するべく活動を開始した。

二 研究経過

「一九九二年度研究経過」

研究計画では、特定の時代のみならず研究が集中していた有名な近畿地方の地域として、伊賀黒田荘地域の三重県名張市と紀伊隅田荘地域の和歌山県橋本市の二カ所を取り上げて、中世のみでなく、近世さらには近代をも、文献史学の方法に加えて民俗学的方法も駆使することで把握する歴史貫通的な研究を掲げたのであるが、その研究期間がわずか二年間であり、しかも研究経費に制約があることを勘案して、二地域の研究は困難であると判断し、重点調査地域を一カ所に絞ることとした。種々検討した結果、中世文書以外の史料の所在に関する情報を得ることができ、和歌山県橋本市の旧隅田荘地域の諸村落において調査研究を展開できる可能性が大きいと予想されたので、二年間でこの地域の調査研究を集中的に実施することとした。

研究は、早速に対象地域に関する各種文献の収集とその共有化・共同化を行うことから開始した。周知のように、隅田荘に関する史料はすでに多くの史料集に収録されて公刊されており、また隅田荘の研究も古くから行われ、その蓄積は膨大な量に及ぶ。それらの基本的なものをコピー等で確保し、また研究論文などは各研究員に配布した。各自は中世史を

中心にした隅田荘の研究成果を学び、かつ検討した。そして、大量に蓄積された中世の隅田荘に関する研究に対して、近世・近代のこの地域に関する歴史的研究はほとんどないこと、また民俗学の調査研究も予想外に少ないことが判明した。近世以降の研究成果の乏しいことが、この地域を安易に後進地域とする理解を生み出していたとも言える。各研究員は、それらの動向を検討することを通じて自己の研究課題の設定の手がかりを得た。また、和歌山大学教育学部の小山靖憲氏に隅田荘を中心とした紀北の研究状況について教示を得ると共に、現地調査の設営に関しても種々便宜をはかっていただいた。その適切な指示によって、現地調査の設営も支障なく行うことができ、以下のように初年度の調査研究が行われることとなった。

七月一日

第一回研究会

石井 進「隅田荘研究の概観」

八月四日～五日

予備調査

九月二三日～二七日

隅田荘の概況調査及び橋本市境原調査
(文書、民俗、地理)

十月三十一日～十一月四日

中世城郭調査

十一月一四日・一五日

近世文書調査

十二月一六日～一九日

橋本市赤塚調査(文書、民俗、地理)

一月四日・五日

橋本市赤塚調査(赤塚堂座講)

二月二四日・二五日

近世文書調査

三月二六日・二七日

第二回研究会

勝田 至「境原中世地名考」

福原敏男「埴岡真弓論文の検討」

石井 進「埴岡論文へのコメント」

一九九二年度は研究の初年度であるため、従来からの隅田荘研究の蓄積を学び、問題点を発見し、自己の課題を設定すると共に、共同研究としての全体の課題を明らかにすべく努力した。それは第一回研究会での報告と討論に示されただけでなく、数次に及ぶ現地調査に際しては、あたかも学生の調査実習の合宿のような雰囲気で、每晚宿舎で昼間の調査の成果を交えてのあつい討論が行われ、また種々の情報交換がなされた。そして、数回の現地調査を通して、中世文書については、有名な葛原文書を実際に確認すると共に、その写真撮影を行うことができ、さらにこの地域には豊富な近世文書が旧庄屋家を中心に多数の家に伝えられていることが判明した。その多くが所蔵者のご厚意によって閲覧調査をさせてもらえることとなり、初年度にも小島家文書、芋生家文書、宮下文書等を調査し、さらにいくつかの文書についても閲覧調査の了解を得られ、二年度めへの明るい見通しをつけることができた。また各研究員は年度末にはほぼ自己の研究課題を明確にするにいたり、二年度めにはそのための資料収集と分析に邁進することができるといふ明るい展望を開くことができた。

初年度の終了にあたり、一年間の研究を確認し、関係者に報告するたために「特定研究近畿地方村落の史的研究―一九九二年度中間報告―」を印刷刊行し、関係諸方面に配布した。そこには研究員の勝田至作成の「隅

田荘地名索引」および「境原関係地図」二葉と現地調査で写真撮影したものの一部を「境原区有文書」として収録した。「隅田荘地名索引」は中世文書などに登場する隅田荘関連の地名を索引としたもので、その詳細な地名一覧は今後の隅田荘研究に大いに貢献するものと判断された。そして、境原は隅田荘研究にとって重要な役割を果たす葛原文書を伝えた葛原家の居住した地域であるが、その地域について文書に出てくる地名を現地での伝承で確認しつつ総合して地図上に記入したものが「境原関係地図」で、非常な労作と言えよう。また、「境原区有文書」は現地調査で撮影した文書のうち、境原の近代の共有林関係の文書を収録したもので、村落の共同性をうかがわせる内容のものである。

「一九九三年度の研究経過」

研究代表者であった石井進が国立歴史民俗博物館長に就任したため、二年度めの研究代表者を福田アジオに交替した。その他の研究員には変更はなく、全員が引続き調査研究に従事した。

研究会および現地調査は以下のような日程で実施した。

九月一三日～一五日 第一回研究会および現地調査

深谷克己「記憶し直される中世」

岩城卓二「近世村落史研究としての隅田荘」

橋本市赤塚、中道調査（文書・民俗）

十一月一〇日～一五日 橋本市赤塚、中道調査

（文書・民俗・城郭）

二月二〇日～二三日

橋本市隅田隅田八幡調査（文書・民俗）

三月二五日～二七日

第二回研究会

米田実「近世甲賀の祈禱寺院と在地神職の

活動」

各研究員の研究成果の概要の報告

水口調査（郡中惣地域と隅田荘との比較検討）

二年度めは、初年度に所在が明らかとなつたいくつかの近世文書について調査をし、主要な文書については写真撮影を行った。調査対象文書は隅田八幡文書、隅田家文書の他は紀ノ川の左岸の赤塚、中道を中心とした地域のもので、宮下家文書、上田登四郎家文書、上田実家文書、上田正嗣家文書等であつたが、さらに赤塚の山田善花家文書のように、今回の調査によつてはじめてその存在が明らかになつたものもある。山田家文書は、慶長年間の売券を多数含む近世前期を中心とした家経営文書であり、その内容はこの地域の近世的体制の成立過程を教えてくれる貴重な史料である（本書巻頭写真参照）。

文書調査が紀ノ川左岸に集中したことに伴い、他の分野の調査も専ら左岸地域の諸村落について行うこととなつた。赤塚と中道に特に集中して民俗調査および城郭調査を実施した。近世の庄屋クラスの百姓が中世以来の家柄を強調し、隅田荘との関連で自己の権威を確立しようとする動向であり、それと紀州藩が認定して把握しようとする地士身分との関連や、有力百姓が特権を村落内で表示しようとする堂座講の変貌・衰退過程が明らかになつた。各研究員は自分自身の問題意識に基づく研究課題を調査を通して分析考察を進めたが、それらは中世隅田荘そのものに

ついでに再検討であり、また近世におけるその伝統との関連に絞られてきたと言える。

二年度めの終了に際して、果たして隅田荘の地域の諸村落が近畿地方村落として一般的な、あるいは典型的な姿を示しているかどうかを考えるために、甲賀郡中惣で有名な滋賀県甲賀郡水口町での現地調査と研究会を行った。また、地元水口歴史民俗資料館の米田実氏から甲賀地方の祈禱寺院について幅広い視野からの研究成果を発表してもらい、比較の視点を得ることができた。

このようにして二年間の研究期間は終了したのであるが、その間に写真撮影などで収集した文書史料は膨大な量に及んだため、各研究員が自己の課題に対応して史料の分析を終えることはさらに翌年度以降に持ち越されることとなつた。また民俗調査や地理調査の結果も同様に豊富な資料を入手したので、整理検討作業に多くの時間が費やされ、その分析はやはり翌年度以降になつた。そのため、制度的には組織は解散した後にも、研究員は相互に連絡を取り合い、研究を進めた。そして、その最終成果を取りまとめるために、自主的な研究会を一九九四年十一月に三重県名張市において開催し、執筆内容を報告し合い、それについて討議検討すると共に、当初研究対象として計画し果たせなかつた伊賀黒田荘についての現地調査を行った。そのような協力関係によつて、各研究員の研究も大きく進展し、一九九四年度末に多くの研究員は研究成果報告論文を提出し、さらに遅れた者も一九九五年夏までには提出し、ここにその報告書を刊行できることとなつた。

三 対象地域

紀伊国隅田荘であった地域は現在の和歌山県橋本市であり、市の東半分がかつての隅田荘の範疇であったと言える。市域の中心部を東から西へ向かって紀ノ川が流れ、その両岸に切り立った河岸段丘を発達させているが、南側の左岸はその段丘面は狭く、山が迫っている。それに対して、北側の右岸はやや広い平地が広がっており、さらにそこから北に向かつていくつもの谷が低い山のなかに入り込んでいる。そして、和泉との国境を形成する葛城山の山脈に及ぶ。紀ノ川を遡上すると大和国に入る。隅田荘は紀伊と大和の国境地帯にあることになる。その国境は山地とか大きな河川ではなく、小規模な河川を境としている。特に紀ノ川右岸では、平地に刻まれた小川ともいべき落合川が境界であり、浅い谷が刻まれた平地両側に展開している。

隅田荘は一〇世紀末に藤原兼家によって石清水八幡宮寺境内の三味堂の料所として設定された石清水八幡宮領の荘園で、はじめはごく小規模なものであったという。一二世紀前半に荘園域内に隅田八幡宮が創建され、その俗別当職および隅田荘公文職にこの地の有力者長忠延が任じられて、その後長氏によって世襲された。この家が鎌倉時代になって藤原氏を名乗るようになり、さらに後には隅田氏を名乗るようになったとされる。隅田氏は惣領家を中心に多くの庶子の家が編成され、領域の一円支配を実現し、石清水八幡宮の支配力は弱まった。隅田氏は隅田党を結

び、この地方の支配を行ったが、一四世紀の元弘の乱において隅田惣領家は滅亡し、その後は隅田党のなかの葛原氏が勢力を伸ばした。しかし、室町時代には守護の勢力拡大に伴い、隅田党の各氏はその被官となって、勢力を次第に弱めていった（中世隅田荘の概要は本書所収の石井進「紀伊国隅田荘研究の課題」を参照されたい）。

隅田荘は紀ノ川の左岸・右岸の両側にまたがっていた。そのため古くから紀ノ川を境に隅田北荘と隅田南荘に区分されていた。隅田荘の中心部分はもちろん平地が広がる右岸にあった。多くの集落が分布し、隅田荘の鎮守であった隅田八幡や隅田氏の氏寺とされる利生護国寺も紀ノ川の右岸にあるし、多くの中世城館址も見られる。隅田荘を支配した隅田氏はじめ有力在地領主はこの地域に居住していたものであろう。それに対して、左岸は耕地として開発可能な平地も少なく、集落も少ない。

近世にはかつての隅田荘の領域は和歌山藩領と高野山領に分れることとなった。大部分は和歌山藩領であったが、南荘の中道村のみが高野山領となって明治維新を迎えている。和歌山藩の農村支配の特色の一つとして注目されるのが地土制度である。隅田荘地域においては、かつての支配者層が近世の兵農分離後武士的性格を保持してそのまま農村部に居住し続けた。その中心的な者たちを元和年間に与力として召し出し、隅田組として編成した。当時の隅田組は一五軒であった。そして、正保年間に入った隅田組の一五人は召し放たれ、今度は地土として編成された。これが一般にいう地土の隅田組である。当初限られた家数であったが、近世後期には新たに興ってきた家が由緒を主張して地土に取上げら

れ、その家数は増大した。また、近世の和歌山藩の支配制度は、広域的な掌握をするために大庄屋を置き、その下で各村に庄屋以下の村役人がいた。旧隅田荘も属する伊都郡は上、中、下に区分され、それぞれに大庄屋が置かれた。旧隅田荘域の村々は上組に属したが、そこには隅田荘域の村だけでは多くの村が属し、全部で三十七ヵ村であった。

近世の支配単位としての村が、明治の町村制施行に先立つ大幅な町村合併で大字となったのであるが、紀ノ川右岸の旧隅田荘域の多くの大字は町村制下では隅田村に属した。それから外れたのが境原とその奥の杉尾で、村も別となり紀見村に属した。一方、紀ノ川左岸の地域の諸村落もそれぞれが小規模ながら大字となり、行政村としては恋野村に属した。その後、一九五四年に隅田村と恋野村は合併し、さらに一九五五年に合併して橋本市となった。その際に、明治町村制の隅田村の地域の十一の字は名称に隅田を冠することとなった(以上、『橋本市史』、『角川日本地名大辞典』和歌山県等の記述を参照)。

近年まではこの地域は農村としての景観を強く留めていたが、紀ノ川右岸の南海高野線に近い地域で急速に開発が行われ、景観が一変した。特に新しく林間田園都市駅が設置されたことにより、境原の近くまで開発が進み、住宅地になってきている。また、JR和歌山線に沿っても住宅地が急速に増えてきており、都市化の様相を示している。それに比べると、紀ノ川左岸地域は農村的な景観を維持している。

四 研究成果の概観

報告書として取りまとめるに際して、各研究員の研究課題を整理して、地域の歴史の全体像を示すように編成することを試みた。その結果、今回の研究成果は大きく三つの編として構成できると判断した。すなわち、「荘」、「村」、「家」である。これはより広域的な世界から狭い世界へと歴史を見ていくことであるが、当時にそれがまた時代的な歴史の展開をもほぼ示していることになる。

「荘」は中世の隅田荘の大きな領域、あるいは隅田荘全体の構造に関わる歴史的展開を明らかにしようとする研究、また近世以降においてもその領域が一定の歴史的意味を有していることを考察した研究を収録した。隅田荘という広がりがいかに形成され、どのような展開をとげつつ現代にいたったのかを考える手がかりを示すと共に、中世に歴史の舞台となった所が近世以降にどのような様相を示したのかをも考えようとした。中世の荘園の特質、近世におけるかつての荘域の動向、特に地主に組織された在地領主層の子孫の動向や隅田八幡の祭祀をめぐる村落連合の様相を、村落内各階層の動向との関連で明らかにしようとした。

それに対して、「村」では荘の領域の中から近世になって姿を明確にしてきた村を単位にした歴史的展開を分析した論文で編成した。中世的な荘の領域と関連しつつ、個別の村が主要な舞台となった近世史研究の成果ということが出来るし、それは現行の民俗の伝承母体であることから

民俗学的な地域研究の成果を収録することとなった。かつての隅田荘内の個別村落には堂座講という特権的祭祀組織としての宮座が存在したが、その宮座構成員はまた水利においても特権を有していた。その特権がしだいに後退し、農民たちを中心とした村落秩序が成立してくる過程を明らかにし、またそのような村落のいくつかの特権を究明しようとした。

そして「家」は中世、近世を通して生活と生産の基本単位であった家に視点を据えた研究を収録した。主として近世における家のあり方を論じているが、その背景には中世の隅田荘の存在が大きく、中世以来の伝統を誇ることで近世以降の自分たちの存立の根拠としようとする家々の動向が明らかにされている。地主という身分に編成され、あるいは取り立てられることに家としての上昇を見る人々の運動に視点を据えて、この地方の家の特質を詳細に明らかにしている。

本報告書に収録された各研究員の研究論文は、「荘」収録の論文でも必ずしも荘園の領域全体を分析対象としているのではない。荘園全体を視野に入れつつ、特定の地域に重点をおいて分析している。「村」や「家」においてはその傾向はさらに強く、荘園全体ではなく、特定の村落、特定の家の分析という研究になっている。それらを通して、集中的に取り上げられ、論じられているのは、紀ノ川右岸地域では境原であり、左岸地域では中道・赤塚である。境原と中道・赤塚は、中世隅田荘の研究にしばしば登場することはもちろん、近世の研究も可能にする近世文書が豊かに残存している地域である。しかし、現状では大きく異なる印象を

与える。

南海高野線で大坂方面から紀見峠を超えて橋本市に入ってくると、すぐに目につくのは山地・丘陵地の大規模開発による住宅地化である。その開発が及びつつある境原は隅田荘研究にとって重要な文書史料である。葛原文書を伝えた葛原家がかつて居住していた地域である。近年は急速に開発が進み、集落の南側のかつての山林の部分はほとんどすべて宅地造成され、新しい街を形成しつつある。そのため、地域社会の変貌も激しく、民俗の伝承においても変化を余儀なくされていることがうかがわれる地域である。しかし、一步古い集落の部分に入ると静かなたずまいを示していることも印象深いものであった。

それに対して、中道、赤塚、恋野等の立地する紀ノ川左岸の地域は未だ完全に農村としての景観を維持しており、近世以来の各種資料に出てくる村落の様相を今に示している地域である。各種の行事や由来等の伝承についても比較的豊かなものがあり、しかも集落と耕地のあり方なかで伝承を確認したり、比定することも比較的可能であった。したがって、民俗から歴史的世界を認識する上でも便利な地域であった。

以下では、その各論文について簡単に読者への案内を試みておきたい。

(一) 荘

勝田至「隅田荘中世地名考」 隅田荘研究に重要な役割を果たしてきた葛原文書をはじめとする各種の史料に記載されている地名の所在地を現在の伝承や現行の地名を調査した上で確認し、それを地図上に描き込む

作業を行い、そこから判明した事柄を記述したものである。付図に示されているその丹念な作業は恐らく今後の隅田荘研究に大きく貢献するばかりでなく、中世の地名を研究する方法としても大いに参照されるべきものである。これによって、境原という一つの地域が中世以来の歴史をいかに豊かに蓄積しているかを、地名という素材を通して明らかにしている。

久留島典子「隅田荘関係文書の再検討―隅田葛原氏を中心に―」従来の隅田荘研究が依拠してきた隅田家文書と葛原家文書について、その両者の関係を検討した論考である。両者の残存文書の記載内容を子細に検討した結果、この二つの文書群は別個のものではなく、本来一つの文書で、葛原氏文書として存在したものと推定している。そして、その文書の記載内容の分析を行い、隅田党と呼ばれてきた隅田一族の結合の形成過程とその要因を明らかにしている。隅田荘について基礎的問題を検討し、今後の研究に際しては必ず参照しなければならない重要な問題提起をした論文である。

藤田達生「兵農分離政策と郷土制度―和歌山藩隅田組を素材として―」中世後期に隅田荘の在地を支配した領主たちは「二五人の地頭」であったが、彼等の多くは近世以降も旧地に居住を続けた。和歌山藩は彼等を地士として組織して「隅田組」とした。兵農分離の結果として城下町に集住した武士たちが、結局は地士という形で村落に居住する武士身分を認めて、支配の一翼を担わせた。これはいかなる理由かを追究しようとした研究である。地士制度を単なる遅れた地域の古い勢力の懐柔策とか

妥協策としてしまわず、幕藩体制の構造の中に積極的に位置付け、把握しようとしている。

岩城卓二「神社と近世地域社会」中世には隅田荘を支配する隅田一族の結合の中核に隅田八幡があったが、戦国時代以降隅田八幡の祭祀は隅田一族、地域の諸村落の有力農民、そして供僧、禰宜、神子等の宗教者の三つの勢力によって担われることとなった。そのなかでも村々の有力農民で構成される「庄中」の成長が近世の村々の地域統合をもたらし、近世的村落秩序を完成させたが、同時にまた供僧、社人等も成長し、「仲間」を形成し、一定の位置を獲得していったことを明らかにしている。

(二) 村

渡辺尚志「近世の村と寺―紀伊国伊都郡境原村を事例として―」隅田荘域のなかで中世以来の文書の残存によって具体的な地域のイメージを作りやすい境原を対象にした研究である。境原には小峯寺という寺院があり、また東光寺という寺院があった。いずれも真言宗寺院である。境原村には中世以来の権威を背景にした四軒の家で構成される「堂座講」があるが、これと寺院僧侶、そして堂座講に参加できない一般農民の対抗関係を、境原村(百姓)と小峯寺・東光寺という寺院(住職)の両者の視点から複眼的に考察し、堂座講の後退と村方からの自立を試みる寺院住職、また発言権を増大させていく一般農民という各階層の動向を明らかにした研究である。

出田和久「明治期における村落景観の変容」近世村落の景観は近年ま

で維持されてきたと考えられやすいが、近世以降現代までに大きな変動の波を被っていることも忘れてはならない。特に地租改正にともなう動向は大きな影響を与えたことを軽視すべきでないという主張を隅田荘域の境原を中心に具体的に分析して提出した論文である。境原は近年急激な変貌をとげているが、その前提となる変動を景観の変化とあわせて明らかにしている。

福田アジオ「紀ノ川左岸における水利と村落」 中世の隅田荘の広域的な展開が、近世になると個別の小規模な村落単位になってしまふのは何故かを課題として、紀ノ川左岸の赤塚を事例に考察した論文である。中世には土居連合ともいべき方式で村落を超えた水利秩序が形成されていたが、近世にはそれが解消し、個別村落領域内で完結する水利秩序となったこと、そしてその水利組織においても特定の家々が独占する組織から家を単位とした当番制へと変化したことを、水利をめぐる民俗を資料にして論じている。

森栗茂一「境界集落の渡世―隅田荘真土村―」 紀伊国のもつとも東端の大和の国境に真土がある。街道に沿った国境の村として古くから知られているが、その理解はかならずしも正しく行われてこなかった。この国境に立地する村落の歴史的展開を伝承によって描き出して、その地域的特質を明らかにしようとした論文である。

福原敏男「森神信仰としての里神」 隅田荘の荘域を含む紀ノ川流域や日高川流域には、森を祭祀の場とした里神と呼ばれる小祠が分布している。この里神を森神信仰のなかで把握して位置づけようとした論文である。

る。隅田荘の荘域で完結する研究ではないが、この地方の個別村落に見られる特色ある民俗信仰を取り上げて論じている。

(三) 家

深谷克己「由緒地域の村役人家」 近世の旧隅田荘の荘域は、中世の在地領主に系譜を引く旧家が多く存在しているが、その特色を「由緒地域」と把握し、その地域における地土取り立ての特質について明らかにした論文である。事例を赤塚村の上田家に求め、上田家は近世成立期には地主として取り立てられるほどの家ではなかったが、その後たえず上昇願望があり、幕末に及び、藩への役儀貢献を挺子に地土取り立てを強力に運動し、ついに成功したことを明らかにすると共に、その際に近世を通して使用していた小林姓を改めて、上田姓に復していることにも注目している。

新谷尚紀「家の歴史と民俗」 中世以来の家柄を強調する中道の上田姓の家二軒と赤塚の上田姓一軒の計三軒について、その歴史的展開を文書のみでなく墓地・墓石のあり方や民俗として示される伝承をも活用して明らかにした論文である。この三家は相互に関係が深く、いずれも南北朝時代の隅田荘の地頭であった上田虎正丸の子孫と伝え、誇りとしてきた。近世を通じてそれぞれの家は変化しつつも、先祖祭祀を行い、家の永続をはかってきたことを実証的に論じている。歴史的に深度のある個別研究として貴重な成果であり、先祖祭祀の問題を考える際の重要な視点と素材を提供している。

以上のような各研究を通して、中世の隅田荘の地域の従来の研究には再検討を加えなければならぬ問題も少なくない点や、隅田荘内の在地領主の動向は近世のこの地方の秩序にも大きく関係していることが明らかにされ、それを前提にこの地方が近世以降も人々の生活の舞台として存続、発展し、中世の特質を背負いながらも独自の様相を示したことも具体的に描き出すことができた。一つの地域が特定の時代を超えて、大きな歴史的展開を示す舞台になってきたことを、隅田荘の領域を事例に検討し提示することができ、幅広い地域史研究の可能性を示したものと判断したい。

最後に今回の特定研究については諸関係機関および多くの方々に多大の便宜をはかっていただき大変お世話になったことを記して深甚なる謝意を表したい。特に橋本市教育委員会、橋本市立郷土資料館には何かとご高配いただいた。また小山靖憲、桜井隆治の両氏からは地元調査対象

地域について種々情報を頂戴し、研究課題についてご教示いただいた。調査対象村落の当時の区長であった境原の松本義一、赤塚の藤田良告両氏には、現地調査の際に大変便宜をはかっていただき支障なく調査を実施できるようにご配慮くださった。また各文書所蔵者の隅田八幡神社、隅田能章、小嶋洋三、芋生孝治、宮下彰義、上田弘、上田正嗣、上田登四郎、山田善花、葛原忠綱の諸氏には、貴重な文書の調査を認め、写真撮影まで許可してくださっただけでなく、調査に際して種々ご配慮いただいた。さらに調査地区の多くの方々は貴重な時間を割いて私たちの聞き書きに応じて、様々な情報をご教示くださり、時には自ら現地をご案内してくださった。以上のような多くの方々のご厚意あふれるご協力によって二年間の研究は充実したものとなり、多大の成果を挙げることができた。ここにあつくお礼申し上げます。

(新潟大学人文学部 国立歴史民俗博物館共同研究員)